

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：33401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00689

研究課題名（和文）構文交替に関わる周辺の現象の研究

研究課題名（英文）A study of peripheral phenomena associated with alternations

研究代表者

入学 直哉（NYUGAKU, Naoya）

福井工業大学・工学部・教授

研究者番号：50597937

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではLevin (1993)において非交替動詞に分類されている48語のcheat型動詞についてCOCA、BNCを使用して調査を行い、15語については交替動詞と見なしうることを示した。また所格交替動詞であるclear型動詞のclear、clean、empty、drainについてEEBO、COHAの史的コーパスから用例を収集し、各々の動詞の補部構造の史的発達の過程を明らかにした。その結果、これらの動詞補部の発達過程は各動詞により異なることを示した。また、各動詞の原義が古英語・中英語期の統語構造に大きく関わっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は非交替動詞が交替する事象や交替動詞の統語構造の史的発達などこれまであまり取り上げられてこなかった構文交替における周辺の現象に焦点を当てた。とりわけ所格交替動詞の中でも研究が進んでいるspray、loadなどの動詞とは反対の意味を持つclear型動詞を取り上げ、その史の変遷を明らかにしたことは構文研究に歴史言語学的視点を取り込むことの意義を示唆したと言える。

研究成果の概要（英文）：In this study we investigated the 48 Cheat verbs listed in Levin (1993) through COCA and BNC and concluded that among the 48 verbs, 15 verbs can be alternating. We also revealed the development of the complements of the Clear verbs, showed that the syntactic structures of each verb have developed differently in the history of the English language, and pointed out that the syntactic structures of the verbs in the Old and Middle English periods have much to do with the kernel sense of each verb.

研究分野：英語学

キーワード：英語史 言語変化 構文交替

1. 研究開始当初の背景

ある動詞が構文交替に参加する交替動詞であるか否かについては定説のようなものがある。例えば与格交替に関しては、give、tell、show などゲルマン系起源の1音節語もしくは第1音節に強勢を持つ2音節語は二重目的語構文と与格構文の両方に用いられる交替動詞であるのに対し、donate、report、present などラテン系起源で第1音節に強勢が置かれない2音節以上の動詞は与格構文のみに用いられ、二重目的語構文には現れない (Gropen et al. 1989, Pinker 1989)。ところがこのような定説に対して高見 (2003) は Open Web からの実例を挙げ、従来二重目的語を取らないとされる動詞のなかで、実際の言語使用においては二重目的語構文で用いられるものが存在することを指摘している。所格交替に関しては、例えば rob は非交替動詞とされるが、コーパスを調査すると交替する例が散見される。また歴史的に見ると rob は被奪取者を直接目的語に取る他動詞構文や、of 前置詞構文以外に、現代英語では非構造的とされる被奪取物を直接目的語に取る他動詞構文や from 前置詞構文、out of 構文、二重目的語構文にも現れていた。このような非交替動詞が交替する現象や交替動詞の史的発達に関してはこれまで余り関心が向けられてこなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の2点である。(1) 奪取・分離・除去などの意味を表す動詞のうち、Levin (1993) において of 前置詞構文にのみ生じる非交替動詞とされる cheat 型動詞に分類されている48語について交替の可能性を探る。(2) 所格交替を行う clear 型動詞である clear、clean、empty、drain に関して of 前置詞構文と from 前置詞構文の発達過程を明らかにする。

3. 研究の方法

Early English Books Online、The Corpus of Historical American English、The Corpus of Contemporary American English、The British National Corpus、Oxford English Dictionary などの各種コーパス、辞書から用例を収集し、分類・分析を行った。

4. 研究成果

本研究では主に以下の2点について調査を行った。なお当初予定していた from 前置詞構文に現れる rob の史的分析については十分なデータが得られなかったため今後の継続課題としたい。

(1) cheat 型動詞の所格交替に関するコーパスに基づく調査

Levin (1993) において of 前置詞構文のみを取る cheat 型に分類されている48語の動詞の使用実態に関してコーパスによる調査を行った。その結果、from 前置詞構文と所格交替を行うと認められる動詞は bilk、bleed、cleanse、deplete、divest、drain、ease、free、milk、plunder、purge、purify、sap、strip、swindle の15語であった。

(2) clear 型動詞と前置詞 of/from の共起関係の史的発達に関する調査

① clear : 前置詞 of との共起関係に関しては、抽象名詞 (abstract noun: AN) を前置詞の移動物目的語に取る「NP (Agent) clear NP (Location) of NP (Locatum: AN)」構造の用例が初期近代英語期には非常に優勢であった。このことは動詞 clear が前置詞 of と共起する場所目的語構文の OED における初出例 (1483 年) において、動詞の直接目的語に再帰代名詞が現れ、前置詞の目的語に抽象名詞が生起していたことと関係する。具象名詞 (concrete noun: CN) を前置詞の移動物目的語に取る「NP (Agent) clear NP (Location) of NP (Locatum: CN)」構造の用例は1600年以降徐々に増加する。17世紀までは「NP (Agent) clear NP (Location) of NP (Locatum: AN)」構造が依然として優勢であったが、後期近代英語期以降は「NP (Agent) clear NP (Location) of NP (Locatum: CN)」構造が優位となる。前置詞 from との共起関係に関しては、初期近代英語期においては「NP (Agent) clear NP (Location) from NP (Locatum)」構造が圧倒的に優勢であったが、後期近代英語から現代英語にかけて「NP (Agent) clear NP (Locatum) from NP (Location)」構造の割合が増加し、現代英語期に入って以降は「NP (Agent) clear NP (Locatum) from NP (Location)」構造が「NP (Agent) clear NP (Location) from NP (Locatum)」構造を完全に凌駕した。

② clean : 歴史的に動詞 clear のプロトタイプである「NP (Agent) V NP (Location) of NP (Locatum: AN)」構造が clean においてはほとんど発達しなかった。これら2つの動詞はいずれも形容詞派生動詞であるが、中英語期にフランス語から借入された clear は13世紀後半に形容詞として英語史に登場後、約100年後には動詞用法を確立させた。他方、clean は古英語から存在する語彙であるが、古英語では形容詞及び副詞としてのみ用いられており、動詞用法が登場するのは15世紀中葉である。さらに他動詞用法の出現は17世紀後半まで待たなければならなかった。そして、この clean の他動詞用法の誕生には動詞 cleanse との意味競合が関わっているこ

とを明らかにした。即ち、動詞 *cleanse* は古英語以来、物理的・抽象的に「～をきれいにする」「～を取り除く」という意味で使用されていたが、17世紀にその意味を *clean* に移譲する際に、物理的意味のみを譲り、抽象的意味は保持し続けた。したがって、*clean* は動詞用法を獲得した以降も「NP (Agent) *clean* NP (Location) of NP (Locatum:AN)」構造を十分に発達させることはなかった。

③ *empty* : 動詞 *empty* に関しては近代英語期以降、現代まで一貫して「NP (Agent) *empty* NP (Location) of NP (Locatum)」構造の方が「NP (Agent) *empty* NP (Locatum) from NP (Location)」構造よりも優位であった。その理由は *empty* の原義が「ある集会在閉会して次の集会在開会するまでの時間的な休止期間」という抽象的な時間的間隔を意味していたことによる。そのため古英語において動詞 *empty* は他動詞構文では抽象的容器を場所目的語に取っていた。これが近代英語期以降に「NP (Agent) *empty* NP (Location) of NP (Locatum)」構造の優位性をもたらした。

④ *drain* : *drain* は古英語では「通水性のものを通して液体を漉す」という意味で使用されており、移動物である液体を目的語に取る他動詞構文がこの動詞の基本構造であった。そのため近代英語期以降、移動物目的語構文である「NP (Agent) *drain* NP (Locatum) from NP (Location)」構造の用例数は *empty* と比較して多く見られる。ところが歴史的に最も優勢なのは場所目的語構文の「NP (Agent) *drain* NP (Location) of NP (Locatum:AN)」構造である。その理由は *drain* は古英語では「通水性のものを通して液体を漉す」という意味であったが、そこから「液体を漉すことによって対象物から水分を取り除く」、即ち「水分を取り除くことによって対象物を乾燥させる」という結果状態を表すようになったためである。その結果、近代英語期以降に場所目的語構文が発達したと考えられる。

【引用文献】

- Gropen, J., S. Pinker, M. Hollander, R. Goldberg and R. Wilson (1989) “The Learnability and Acquisition of the Dative Alternation in English”, *Language* 65, 203-257.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago.
- Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge.
- 高見健一 (2003) 「Donate, purchase 等は本当に二重目的語をとらないか?—母語話者の指摘と実例の報告—」『英語青年』第 149 巻, 第 6 号.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 入学直哉	4. 巻 53
2. 論文標題 動詞cleanの補部構造の史的発達について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福井工業大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 163-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 入学直哉	4. 巻 52
2. 論文標題 英語史における動詞clearと前置詞of/from	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福井工業大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 126-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 入学直哉	4. 巻 51
2. 論文標題 Cheat型動詞と所格交替 コーパスに基づく実証的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福井工業大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 103-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------